

## イメージとしての「郊外」

山 岸 郁 子

キーワード：郊外文学・団地・経済成長・ニュータウン

## はじめに

「郊外」という言葉は1901（明34）年国木田独歩の『武蔵野』<sup>1)</sup>に収められている短編小説のタイトルにもなっており，そこでは「都の近在」という意味で使われている。また「武蔵野」の中には次のような一節がある。

郊外の林地田圃に突入する処の，市街ともつかず宿駅ともつかず，一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈しおる場処を描写することが，すこぶる自分の詩興を喚び起こすも妙ではないか。なぜかような場処が我らの感を惹くだらうか。自分は一言にして答えることができる。すなわちこのような町外れの光景は何となく人をして社会というものの縮図でも見るような思いをなさしむるからであろう。言葉を換えていえば，田舎の人にも都会の人にも感興を起こさしむるような物語，小さな物語，しかも哀れの深い物語，あるいは抱腹するような物語が二つ三つそこの軒先に隠れていそうに思われるからであろう。さらにその特点をいえば，大都会の生活の名残と田舎の生活の余波とがここで落ちあって，緩やかにうずを巻いているようにも思われる。

(以下下線は引用者)

物語が生成する場所として「郊外」を捉え，その理由を「何となく人をして社会というものの縮図」を見るような思いがするからだとしている。それは「田舎の人」と「都会の人」が交わる場所でもあるからだろう。しかしこのような生活と自然が「配合」する場所は極めて人為的な操作によって造られていくものなのである。

1913（大2）年，東京信託株式会社は東京府荏原郡駒沢村・玉川村にまたがる約23万平方メートルを宅地造成し「郊外生活用に供する目的」で売り出した。広告文には「近くは玉川の清流を控へ，遠くは秩父の連山富嶽の秀嶺を仰ぎ，朝暉恰も一幅の画中に在るが如く」とある。風光明媚な世界に身を置

<sup>1)</sup> 民友社 1901年3月。「武蔵野」の初出は「今の武蔵野」『国民之友』1898年1月・2月

くことに価値を見出すことができる一定の層のために「一幅の画中に在るが如く」というイメージが投下される。そのイメージは加工のない自然をフレームの中に収めたものである。

しかし、この分譲地はなかなか完売しなかった。生活空間としてイメージすることができなかったのである。この土地を人びとが選ぶようになるのは、1923（大12）の関東大震災後のことである。

1925（大14）に荏原郡に住み、小学校で代用教員をしていた坂口安吾は「井の頭線の線路北側はだいだらぼっち川に沿った崖線である。かつては緑に蔽われていた」と「風と光と二十の私と」<sup>2)</sup>（1947）で書いている。「私が代用教員をしたところは、世田ヶ谷の下北沢というところで、その頃は荏原郡と云い、まったくの武蔵野で、私が教員をやめてから、小田急ができて、ひらけたので、そのころは竹藪だらけであった」[この緑を原始林とすらっていた。この原始林をマモリヤマ公園などと称していたが、公園どころか、ただの原始林で、私はここへよく子供をつれて行って遊ばせた]<sup>3)</sup>。そのマモリヤマ公園は、1937（昭12）年に「守山公園分譲地」として売り出された。「東南向高台 松樹点在する明朗住宅地」と広告にはある。「原始林」という自然を「松樹点在する明朗住宅地」と加工し、空間を再定義した上で一定の層に訴求していくのである。何よりも帝都電車・小田急電車下北沢駅前という位置やガス、水道、道路、下水道が完備していることが生活をイメージするためには重要であった。

守山公園分譲地

賣出開始

東南向高台  
松樹点在する明朗住宅地

位置 小田急電車 下北沢駅前  
小田急電車 下北沢駅前

賣價 四十圓より 五十五圓まで  
區劃 六十坪より 二百坪まで

特賣 六月五日より 末日

設備 瓦斯 水道 溝 下水 左右 後 完備

土地 一割拂込 残額は  
代金 十ヶ年賦 拂可

建築 千五百圓まで 融通

資金

○案内 番地 昭

鎌倉 大和田町 鎌倉 藤原

東横 目黒 電車

田園都市課

電話 青山 七五〇番  
七一五番

（「東京日日新聞」 昭和12年6月20日）

箱根土地の堤康次郎が東京府下の練馬から隣接する埼玉県までの約330万平方メートルの土地を買収し小平学園都市の建設を始めるのも震災直後の1924（大13）年である。翌年には国鉄中央線の国分寺駅と立川駅間の土地を「国立」と名付け、建設に着手する。当時は請願駅制度といって駅舎をつくり鉄道省に寄付すれば新駅として認められたのである。国立は東京高等音楽学院と東京商科大学の誘致を

<sup>2)</sup> 「文芸」第四卷第一号（新春号）1947年1月

<sup>3)</sup> 1925年荏原郡世田ヶ谷町の荏原尋常高等小学校（現・若林小学校）に採用され、その分教場（現・代沢小学校）の代用教員となり、5年生を担当する。分教場主任の家に下宿し、月給は45円であった。

目玉としていたが、商科大学の校舎が完成し、大学関係者が移動して来たのは1929(昭4)年以降のことである<sup>4)</sup>。ここでは土地に新しい名前を付けることと大学が持つイメージによって空間が学園都市として再定義されている。住宅供給事業によって境界が曖昧になり東京圏が拡大され郊外は新しいイメージを付与されながら広がっていったのである<sup>5)</sup>。田園調布もまた『理想的な住宅地「田園都市」の開発』を目的とする田園都市株式会社により開発され、1923年(大正12年)8月から分譲された。

この頃のことを今和次郎は次のように述べている。

落合、洗足、田園都市等の計画的な郊外住宅地に於いては、理想に近い光景が見れるといつていた。一般郊外は、より無統制で、乱雑で、道路も敷地もそして家屋そのものも各種各態のものが混乱的に建てられたものとなつている。トタン屋根の貸し家その他雑多である。そして実際番地もなにもあつたものでない。郊外の人を訪問するとき番地だけではどうも探してあげられないのが普通である。<sup>6)</sup>

交通網の発達と土地の大規模開発によって統一的なイメージを与えられる郊外と無計画で無秩序な郊外存在をこの文章は示している。これはまた戦後の郊外化の問題とも同一線上にある問題である。「詩興を喚び起こす」郊外が戦後どのような軌跡を辿るのかその表象と関わらせながら検証する。

## I 人口増加の受け皿としての郊外

1920(大9)には117万7018人であった東京市の人口が関東大震災を経て1925(大14)年には210万3800人、1930(昭和5)年には289万9900人まで増加した。震災後「特別都市計画法」(大正12年12月24日法律第53号)が公布され、急遽農村地域の区画が整理された。この「特別都市計画法」は戦災後にも公布(昭和21年9月11日法律第19号)される。この都市計画の特例である震災・戦災復興事業が住宅供給事業へと移行していった。戦災による家屋焼失と膨大な復員・引揚人口を吸収するための住宅問題が深刻化した中で第二次「特別都市計画法」が公布される。東京への引揚者は1946(昭21)年度末時点で32万人にも上っていたが、恩賜財団が有していた建物の収容能力は1万3000人であった<sup>7)</sup>。そのため復興期には膨大な労働力人口が一旦地方(特に農村部)に吸収された。そのプールされた人びとと、機械化と化学肥料・農薬の普及によって省力化・兼業化が進められた農村部の余剰人口が都市勤労者になるためには住宅建設が優先されねばならなかったのである。1955(昭30)年7月、42万戸の住宅建設を目指して鳩山一郎内閣によってスタートしたのが、日本住宅公団であった[表1]。

1955年から1973年まで実質GDPの増減率の平均が9.1%という経済成長の中で人々は生活様式を急激に変化させていった。日本住宅公団は「nDKモデル」といった間取りを標準化し、大規模な住宅供

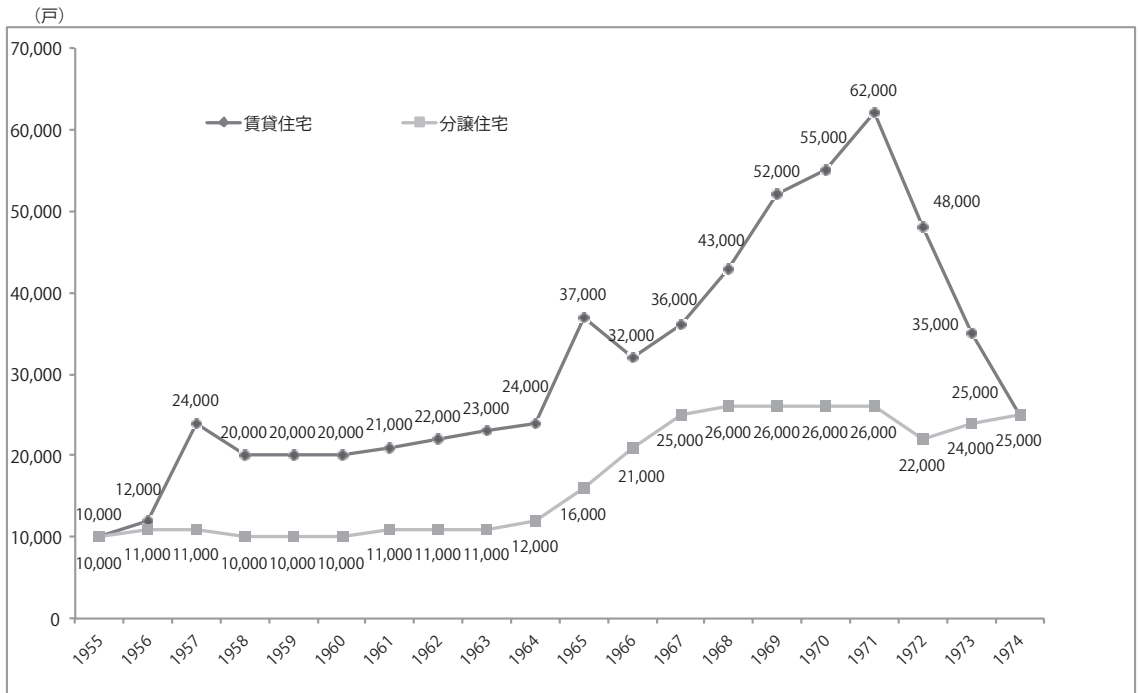
4) 『郊外住宅地の系譜』山口廣編 鹿島出版社 1987

5) 「住居表示法」1962年5月10日法律第119号

6) 『新版 大東京案内』今和次郎編 中央公論社 1929

7) 厚生省『引揚援護の記録』クレス出版 2000

表 1 日本住宅公団の賃貸住宅の計画戸数



出典：「日本住宅公団 20 年史」日本住宅公団 1975 より作成

給を続ける<sup>8)</sup>。これは間取りと家族規模を一致させていくという発想に基づいている。都市化・工業化への転換を目指すシステムは人びとの生き方までも変換させていったのである。産業構造の変化によって世帯人数の小規模化が起り、新しい家庭像が欲望されるようになる。地縁や血縁とも切り離された「家庭」が公団住宅に吸収され、消費文化を支える社会の基点となっていく。新たな生活のスタイルが標準化するとともにそれは人びとの欲望にも当然変化をもたらしていった [表 2]。

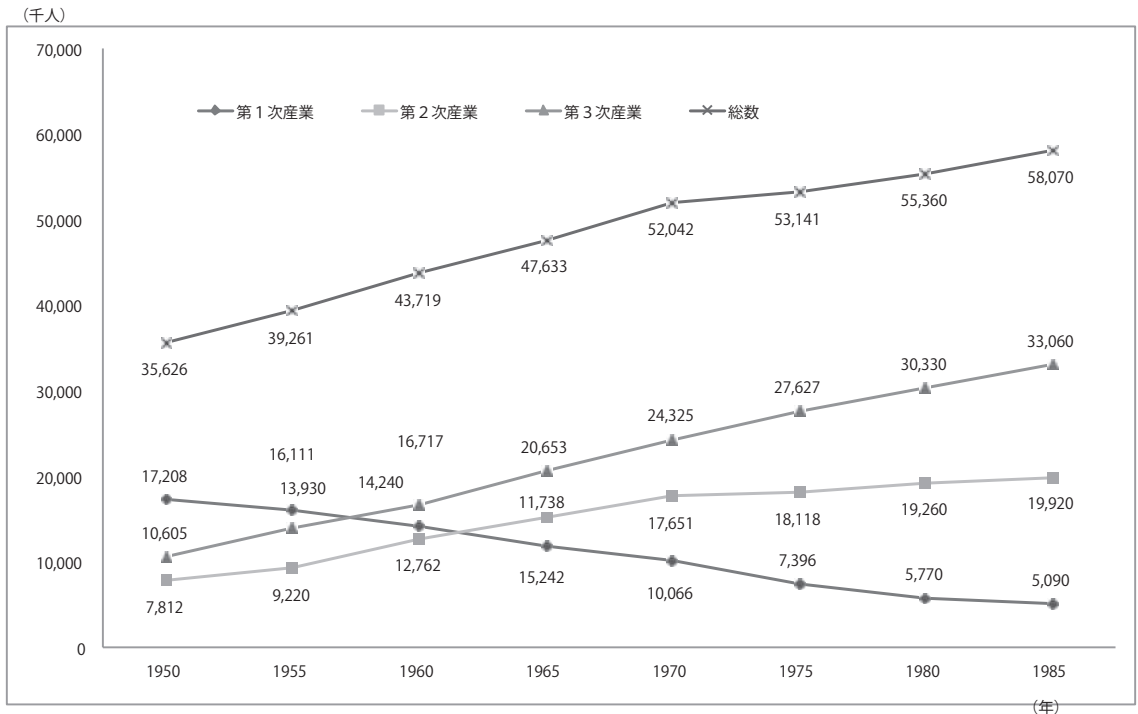
一旦賃貸住宅に収まった都市勤労者の達成すべきゴールはマイホームを持つものだという幻想を与えられ、それを実現するための住宅ローン政策<sup>9)</sup>が用意される。人々はそれぞれの収入に見合った場所へ移動することによって、さらに東京圏を拡げていく<sup>10)</sup>。郊外の住宅といった「器」へ辿り着くまでの家族の在り方をも規定していくことになるのである。総務庁が 1955 (昭 30) 年に定義した郊外は都心から通勤で 45 分以上であった。

8) 『nLDK の誕生 近代日本の住宅事情』新谷尚紀・岩本通弥編『都市の暮らしの民俗学③』吉川弘文館 2006

9) 住宅金融公庫が創設されたのは、1950 年 6 月である。戦後の住宅不足を補うために融資の対象は、住宅分譲業への法人融資であった。1970 年になり、現在と同様の民間分譲住宅の個人融資が開始された。2002 年までの累計融資残高は、1909 万戸、180 兆円に達している。

10) 1950 年代に日本政府の特殊法人住宅金融公庫が設立され、公庫融資が普及することになった。住宅投資政策の一環や財政投融資による潤沢な資金調達環境により、25 年超の長期間固定金利で民間金融機関よりも低い貸出金利であった。

表2 産業別就業者数の推移



出典：「戦後史大事典」三省堂 1991 より作成

## II 物語空間としての「団地」

横溝正史の「白と黒」は詩人のY・S先生が七月から九月まで避暑に行っている間の「三ヶ月のあいだに現代の奇跡が、忽然として東の空に出現していた」と始まる団地(「日の出団地」)が舞台の推理小説である。1957(昭32)年に書かれた短篇「渦の中の女」(『週刊東京』11)の長篇改訂版であり『日刊スポーツ』に連載(1960.11.06～61.12.19)された。団地は「現代の蜃気楼」,「あらゆる装飾や媚態を拒否する」,「一種厳肅で荘厳なもの」と描写され、そこに集合する人びとの過去が交錯する場所として描かれている。その「メインストリートを中心として、同じ規格の建物が、まずざっと二十くらいは並んでいるだろうか。どの建物も五階建てで、ひとつの建物に五十世帯くらいは収容できる」団地で怪文書事件が起こり、金田一耕助が招き入れられる。

団地にはいろんな人が住んでますわ。あたしなんかそのひとりなんですけれど、いままでぜんぜん見もしらなかったひとたちが、わっと集まってきて、ここでひとつの生活をはじめますから、いろんなことが起こるのが当然かもしれないわね。

と予言される通りに殺人事件が起こるのである。

それより3年前に発表された「渦の中の女」ではその場所は「日の出町」といってね、戦後新しくでき

たアパート都市なんです」と説明されている。

建ち並ぶ四十幾棟かのアパートは、ひとしい距離をおいて整然と配置され、道路等もかなりよく舗装されている。しかもアパートはまだ続々と建つらしく、鉄筋をうちこむ音が騒々しい。だれでも、武蔵野の原野の中に忽然として出現した、このアパートの聚落をはじめて見た時は、思わず眼を視張らずにはいられないだろう。それはあまりにも周囲の風物と不調和であり、そしてまたあまりにも劃然としすぎた感じだが、現代の日本ではそれもやむをえないことであり、そういう感懐をもつ金田一耕助こそ、すでに前時代的というべきかもしれない。

ここではまだ事件が起こる場所を「団地」と表してはいない。1959（昭34）年に成婚した皇太子夫妻が「ひばりが丘団地」（東京都北多摩郡田無町）を訪問し、「お話はキッチンとおフロのことが主で、ゴミの処理場など細かい点にまでお気づきでした」と訪問を受けた74号室の会社員夫人が感想を述べたのが、1960（昭35）年9月6日である<sup>11)</sup>。1961（昭36）年2月発行の『国民生活白書』（経済企画庁）には「われわれの日常生活における大変革」として「もっとも典型的に進んでいる地域社会として、いわゆる『団地』をあげることができる。団地は戦後の住宅政策の一環として進められた大都市周辺における住宅公団あるいは地方公共団体、大企業によって新しく建設された鉄筋耐火構造アパートなどの集団住宅区域のことであり、ひとつの新しいコミュニティ（地域社会）を形成している」と書かれている。さらに居住する住民の特徴は、パン食の普及率が高い、耐久消費財の普及率が高い、家事労働を軽減化し主婦に余暇が生まれているなど「生活の洋式化」が促進されている、とある。

「団地」は正式な名称ではない。1965（昭40）年8月24日『朝日新聞』の団地の歴史を振り返った記事に「33年団地族という言葉が生まれた」とあるように、1958（昭33）年に『週刊朝日』が「団地族」という言葉を使ってから、新聞にも「団地」の抽選倍率の記事が散見されるようになる。メディアによってつくられた「団地」という言葉とイメージが「渦の中の女」を「白と黒」として長篇化するまでの3年の間に定着していったと考えられる。そしてメディアが憧れの生活として煽った「団地ライフ」の「負」の部分をついフィクションは描き出すのである。

安部公房の『燃えつきた地図』（1967）<sup>12)</sup>は、突然失踪したサラリーマンを捜索している探偵が、男の足取りを追っていくうちに自分自身の記憶を失って自らも失踪してしまう物語である。捜査の手がかりを求めてさまよう探偵は郊外と都市を往還する。探偵は最後に車を運転し「目的のない時間の消費」をするが、それはまるで「地図にのっていないどこかでふと目を覚ましたような感じ」のようだという。「地図にのっていない」という郊外の団地がもたらす錯覚が物語の生成を喚起しているのだ。

たちまち、風景が一変した。白く濁った空に、そのままつづいているような、白い直線の道。幅は目測で約十メートル。その両脇の歩道との間に、ちょうど膝くらいの高さの柵でかこまれた、枯芝の帯がつづいていて、その枯れ方が一様でないせいだろう。妙に遠近法が誇張され、じっさいには各階六戸、四階建ての棟が、左右にそれぞれ六棟ずつ並んでいるだけなのに、まるで模型にした

11) 『讀賣新聞』1960年9月7日

12) 書き下ろし長篇小説 新潮社 1967年9月

無限大を見ているような錯覚におそわれる。建物の、道に面した部分だけが白く塗られ、わきをくすんだ緑で殺した、その色分けが、さらに風景の幾何学的な特徴をきわだたせているのかもしれない。この通りを軸に、団地は大きく両翼をひろげ、奥行きよりもむしろ幅のほうが広いらしいのだが、採光のためだろう、たがい違いにずらして建ててあるので、左右の見透しは、ただ乳色の天蓋を支える、白い壁面があるだけだ。

ぼくは燃料店の仕組みのことは、よく分からない。しかし、住宅地が郊外にむかってひろがるにつれ、炭屋もプロパンガスのおかげで、商売をひろげていき、人口が増えれば増えるほど、繁盛し……だが、成長しすぎた爬虫類が、けっきょくは哺乳類に、道をゆずらざるを得なかったように、いずれ都市ガスにあぶらげをさらわれてしまうのだ。都市の成長によって、誕生し、都市の成長によって、死滅する、なんという皮肉な商売だろう……

安部公房の描く世界はフィクションでありながら同時代と地続きであることは次の記事からも明らかである。

新興住宅地が“雨後のタケノコ”のように誕生している神奈川、埼玉、千葉の各県では、すでに全需要戸数の5、60パーセントがボンベを運べばその日から“火”がつけられる簡便なプロパンガスに占められている。農地の宅地化、工場進出などで田畑を失った組合員をかかえる農協にとっても、ガス事業は魅力ある商売の1つである。都市近郊の農協のほとんどが、ガス・スタンドをかかえ、かつては種子や肥料、飼料など生産に直結するものを売っていた手で消費材を売りまくっている。  
(『毎日新聞』1967年11月11日)

1963(昭38)年から新住宅市街地開発事業が始まり、日本住宅公団が都市計画のもとに進める団地建設が郊外へと向かうのと平行して民間のデベロッパーも参入し、無秩序な住宅が建ち始める。

1968(昭43)年になると郊外の宅地が都心からかなり離れていても高騰していることがわかる<sup>13)</sup>。この記事には都心から80分以上でないとは平均的な賃金労働者にとって適正な土地は見つけにくく、東武東上線、中央線沿線の値上がりが目立ち、東武日光線、常磐線、東武野田線方面が比較的手に入りやすいとある。どの鉄道の沿線にあるのか、近隣の環境はどうか、郊外に新たな階層性が生まれているのである。

### III 消費する場所としての郊外

通勤距離が伸びることによって、職住が切り離された人びとは必要に迫られて車を所有する。1970年代から1980年代にかけてそれに伴いいわゆるロードサイドビジネスが主要幹線道路沿いの田畑の中

<sup>13)</sup> 「道遠い“持ち家” 建設省調査」『朝日新聞』1968年3月1日

に進出し、日本はそれらの店舗に覆われていく<sup>14)</sup>。松山巖の『肌寒き島国 近代日本の夢を歩く』<sup>15)</sup>には、沖縄で「道路沿いにファミリーレストラン、パチンコ店、ビデオショップが並んでいる。日本各地の風景がこれほど均一になったのはいつからだろう」とあるが、もはや東京と郊外で起こっていることは地方でも起こっていることでもあった。

ロードサイドビジネスは発展形態としてチェーンストアを志向する。連鎖的に出店し、大量仕入れ・大量販売・大量消費を可能とするローコスト運営の店舗づくりは画一化を生む。日本住宅公団によって拡大した団地と民間によるロードサイドビジネスによって消費生活の均質化が促されていくのである。

昔ながらの商店街が支える「街」から、ロードサイドの大型ショッピングセンターのある「郊外」へ、風景とともに生活動線もまた均質化されていくのである。その結果車でどこを走っても「同じ」風景であるような錯覚に陥るのである。もはや私たちは容易に〈ここではない、どこか〉へは行けず、どこまで走っても〈いま、ここ〉に居続けるということになるのだ。そこは固有な名をもった特定の場所ではなく、ただの「郊外」である。

うちは土地成金だからな、オヤジは大金で人間がだめになるとか言って今でもトマトとナスをつくっているんだぜ、調整区域だからバカ高い税金はらってるっていうのにさ、土地の値段からするとトマト一個五万円なんだ、ひどいもんだろ。

村上龍の「テニスボーイの憂鬱」(『BRUTUS』1982～84)に登場するテニスボーイは新興の住宅地で消費の快楽に溺れながらも、「寂しい町」で暮らしたいという思いに取り憑かれる。そこは「マクドナルドとかケンタッキーとか絶対にないような町」とイメージされる。それに対して、愛人は「難しいわよ、そんなの、今、どこにでもあるもの」と言い放つ。それでもテニスボーイは開発された郊外からの脱出を願い、憂鬱が晴れることはないのである<sup>16)</sup>。

#### IV 「東京論」に見られる幻影

1970年代から80年代にかけて「東京論」が次々と登場する。文学評論でいうと1972(昭47)年奥野健男『文学における原風景』、1978(昭53)年磯田光一『思想としての東京』、1982(昭57)年前田愛『都市空間の中の文学』、1986(昭61)年同じく『幻景の街』などである<sup>17)</sup>。磯田は1926(昭元)年9月の内務省告示による用途地域の指定が下町と山の手の関係を大きく変えたとし、下町が山の手に支配され独自の文化を失っていくさまを文学の中に確認する。前田愛は下町と山の手、山の手の中心部と

14) 『〈郊外〉の誕生と死』小田光雄 青弓社 1997

15) 朝日新聞社 1995

16) 一方では多くの人々はコンビニやファミレスなどの「匂いのない」空間で「名前を欠いた存在」になることを好む、という捉え方もある(山本理顕編『徹底討論私たちが住みたい都市』平凡社 2006)。

17) 他にも『モダン都市東京』海野弘 中央公論社 1983、『乱歩と東京1920』松山巖 PARCO出版 1984、『東京の空間人類学』陣内秀信 筑摩書房 1985、『東京 下町 山の手 1867-1923』エドワード・サイデンステッカー 安西徹雄訳 TBSブリタニカ 1986などがある。「都市を味わい、都市を批評し、都市を創る」雑誌「東京人」(都市出版)が創刊されたのは1986(昭61)年であった。



周縁部を構造的に解説した。これらの分析は都市や街といったものに象徴的な意味を見出すことができるということを前提におこなわれており、そこにはテキストへの信頼が宿っていた。

これらの評論がバブル前夜からバブル経済期のもので書かれたことは重要である。中心と周縁が内包していた格差というシンプルな図式を持つ過去の幻影すら消費されるものになったということである。都市景観が大きく変わりゆくなかで、かつてあった場所に宿る「思想」を取り戻す行為であったのではないだろうか。

現在は都市部であれ郊外であれ、そこに一つの文脈を与えることはもはや困難である。人びとの暮らしは国の政策と資本の運動の中で欲望するように仕組まれており、それは次々と上書きされていくのである。

## V ベッドタウンからニュータウンへ

島田雅彦の「新しいサヨクのため嬉遊曲」(「海燕」1983. 6)は1960年代生まれで80年代に大学生である自分を左翼ではなく「サヨク」という別物として世界の中に位置づけている。

僕は最初のベッドタウン二世なんだ。つまり、ベッドタウンに移ってきた僕の親が一世でその子が二世ということなの。親はサラリーマンだから子もサラリーマンの世襲をするのが相場だよ。東京近郊に住んでいればよっぽどの理由がなきゃサラリーマンになるよ。ホワイトカラー層が増えれば保守化するだろうね。それは家庭的な人間が増えるからしょうがないけど。変革もやはり同じ階級の人間がやるべきだけ、やっぱり。

膨張する郊外の例としてベッドタウンからニュータウンとなった多摩地区(多摩市、八王子市、稲城市、町田市にまたがる地区)を時系列で追っていく。1970(昭45)年京王相模原線の延伸と小田急多摩線の開業と延伸を見越して「新都市センター株式会社」が設立された。その後1986(昭61)年新住宅市街地開発法が改正される。これはいわゆる規制緩和で「住宅都市」から、「多機能複合都市」を目指すあたり、多くの民間企業の参入を促すものであった。1988(昭63)年(株)多摩ニュータウン開発センターが設立され、新たに造成された地域を「ニュータウン」<sup>18)</sup>と名付けた。ベッドタウンからニュータウンへ空間が再定義されたのである。「家庭」はそこに新しい幻想を抱くようになる。しかしコントロールされているはずの景観は「ベルコリーヌ南大沢」「パルテノン多摩」「コリナス長池」という名前に示されているように、どこか書き割りのありフィクショナルな空間であった。

都心への通勤を前提とした「郊外」は通勤生活の終了とともに「郊外」ではなくなるはずである。重松清『定年ゴジラ』(1998)は定年後に一戸建てのニュータウンに暮らし続けなくてはならない男達の

<sup>18)</sup> 国土交通省はニュータウンを次のように定義している。

1. 1955年度(昭和30年度)以降に着手された事業
2. 計画戸数1,000戸以上又は計画人口3,000人以上の増加を計画した事業で、地区面積16ha以上のもの
3. 郊外での開発事業(事業開始時に人口集中地区外であった事業)

物語である。重松は最新作『たんぽぽ団地』（2015）に至るまで、ニュータウンを舞台に多くの物語を描いている。「カラス」（『見張り塔からずっと』1995）はバブル時代に不動産屋にのせられて25年ローンで高級マンションを買い、大損してしまった男とその妻が、バブル崩壊によって1千万円も安く一室を手に入れた新住民をいじめぬいたあげくに追い出す話である<sup>19)</sup>。多摩ニュータウンでももちろん同様の問題が起きていた。さらに現在は、地価の下落のみならず、高齢化や税収不足が深刻化している。地方都市の郊外に造られたニュータウンもまた同様である<sup>20)</sup>。

### おわりに

1999（平11）年『建設白書』（建設省）は「人口の動きから見た住宅・社会資本」をテーマに掲げ、都市でも自動車への過度の依存を回避し、ゴミ焼却熱や下水熱の利用を行ない日常生活のエネルギー効率を上げることの重要性が示されている。そして再び資本の流れを都市に逆流させようという政策がとられはじめた。再開発計画地域の指定を受けて六本木ヒルズは2000（平12）年に着工している。事務所・店舗・共同住宅・ホテル・美術館・映画館・テレビスタジオ・学校・寺院・駐車場からなる複合施設である。担い手は自治体、デベロッパー、住宅産業というように国家資本の論理によって計画されたものである。

湾岸副都心建設に代表されるような新たなニュータウンの造成と内部へのコンパクト化（高層化）によって、もはや「東京」は同一の像を結ぶことは困難であり、そこには恣意的な経済活動があるばかりである。ターミナルステーションは同じようなインフラを備え、特異性を見出すことはできない。これは連続性に基づく歴史や空間からの離脱でもある。

地方都市も同じように東京の模倣が創りだされていった。1962（昭37）年の「国土の均衡ある発展」（全国総合開発計画）以降種々な規制緩和によって都市部の大企業との競争から地方中小企業を保護し、公共工事を通じて経済成長の成果を農村地域へ還流させ、均質化しようとした。しかしその土地の固有性を無視しての均質化政策は様々な歪みを生んだ。

岡崎京子の『リバーエッジ』<sup>21)</sup>はバブル崩壊後の東京郊外が舞台である。川の向こうに遠景として常に東京の高層ビルが映し出され、こちら（郊外）側の世界にそれぞれ複雑な事情を抱えた人びとが存在する。漫画という表現方法であることによって「暴力」「死」「性的逸脱」などが日常の中で軋轢を生んでいるさまを可視化させることに成功している。登場するティーン達は対面ではなく同じ方向を見ながら会話をし、微かに心を通わせる。彼らは日常から隠されもっとも遠ざけられている「死体」を草む

19) 多摩ニュータウンにある4LDKの分譲団地を購入するがバブルが崩壊し、必死で手に入れた郊外住宅も資金を借りた銀行のものでしかないという現実を描いた『ニュータウンは黄昏れて』（垣谷美雨 新潮社 2015）にも同様のエピソードが登場する。

20) 『ニュータウン物語』（本田孝義監督 2003）は岡山市の郊外の山陽団地で生まれ育った人を追ったドキュメンタリー映画である。

21) 「CUTiE」1993年3月～1994年4月

## イメージとしての「郊外」(山岸)

らで発見し、腐敗していく様を確認することによって、「生きている」という感覚をとり戻そうとする。そのあとの中で岡崎京子は彼らが生活する場所を「すでに何もかも持ち、そのことによって何もかも持つことを諦めなければならない子供達、無力な王子と王女。深みのない、のっぺりとした書き割りのような戦場」と捉えている。

イメージは直接個人とつながり、支配する。2005（平17）年都市基盤整備公団（現独立行政法人都市再生機構 UR 都市機構）は広大な造成地を抱えたまま多摩ニュータウンの開発を終えた。そしてまたそこから新たな表象が生み出されていくのである。